# ヴァラエティ・ワールド

ぶんろく
Bunroku’s Factory

# ヴァラエティ・ワールド

ぶんろく

Bunroku’s Factory

窓から差しこむ街灯が天井に反射し、ざらついた粒子となってベッドの上の人間に降り注いでいる。その人間――長沼聖美は夢を見ていた。聖美は自分の見ている夢に腹を立てていたが、夢の結末が知りたくて目を開けずにいる。

「ほらみてごらん。ぼくたちの赤ちゃんだよ、かわいいねぇ」

「これはなに！　いったいなんなの！　わたしは人間の赤ちゃんを産んだんじゃないの？」

「これも人間の赤ちゃんさ。でも、姿がちょっと違うだけじゃない」

「なんでそんなに冷静でいられるの？　わたしがコレの母親だというの!!」

「そうさ。デザイナー・チャイルド同士の親から生まれた新しい人類だよ。さぁ、抱いておあげよ」

「いやぁぁぁぁ」

聖美は目をあけた。青白い天井に網膜の血管が逆照射して銃弾を打ちこまれたガラスのようにひび割れる。ろくでもない夢だった。自分が馬鹿げた夢を見た原因がわかっているだけに余計に腹立たしかった。

卍

シティホールに足を踏み入れた聖美は顔をしかめた。ホール内に充満する獣の生臭い空気が鼻を付いたからだ。

目の前のカップルは、男が女を逃がすまいと肩を鷲掴みするように会場に入っていく。

なんだこのカップルは？　二人三脚じゃあるまいし、ギクシャクギクシャク歩いて。はじめてラブホに入っていくみたいじゃん。フンと鼻を鳴らしながら、カップルに続いて会場に入っていった。

独身女性か――仕事を続けながら子供を二人育てれば老後は安心だからな――、聖美一人で会場に入るのを見送って、係員は客席に通じるドアを閉めた。

かすかにロックされる音が鳴った瞬間、ドアに体当たりした女がいた。女はしばらくドアを引いたり押したりしていたが、効果がないとわかると、ドアの前に座りこみ、泣きはじめた。

少し離れて、男が手持ち無沙汰に立っている。
「ばっかぁー。あんたが寝坊するからよ。昨日の朝、あれだけ言ったのに、酔っ払って帰ってきてっ。今朝だって蹴飛ばしてもおきないし。子供がほしいっていう私の気持ちを忘れたの。もぉうだめっ。抽選会に遅刻した人間は一年間は抽選会に参加できないのよ」
「ごめん」
「許さない！　離婚する。いい？　あなたのせいなんだから、わたしはなにも悪くないんだからぁ。あなたが自分が悪いという上申書を書くのよっ!!　そうすればわたしはリストから外れる。それから、あなたじゃない人と結婚する。そして、子供を産むの」
「な、なにも離婚することはないだろう。子供なんていなくても、俺たち愛し合っているじゃない。それに、一年待てばまた抽選に参加できるし……」
女はバッグの中を探ってティッシュを取りだすと、大きな音をたてて鼻をかんだ。

今日は、子供を持ちたい人々を対象に一ヶ月に一度行われるバースコントロール委員会主催の抽選会である。当選すれば子供を持つことができるだけでなく、税金が控除されたり、養育費が国から支給されたりするため、いまでは、蓄財には子育てが一番といわれていた。既婚、未婚の男女を問わず参加できるため抽選会への参加希望者は多く、抽選会に参加するにも抽選があり、抽選会に参加できた人はそれだけで幸運と言える。

聖美が座る観客席の最後部からは舞台が名刺サイズにしかみえない。聖実はみかけは女だが、生物学的構造上は男、性的嗜好も「正常」だった。

聖美は、幼い頃に両親に捨てられ、施設で育ったことを除けば、聖美は勉強もスポーツも万能だった。初対面の人間は聖美の顔をしばらく見つめた後「芸能人のだれそれに似ている」と必ず言う。だが、その芸能人の名前は毎回違っている。男らしさを失わない程度のやさしげな顔立ちは女性の歓心を惹いた。贅沢な悩みと言えばそれまでだが、完璧なバランスの何ひとつ不自由しない自分がいやだった。だから、女装とはいわないが、女性的なファッションでわざとバランスを崩

して、町を歩くことが多い。人になんでそんな格好をしているんだと聞かれると、気が向けばいちいち説明するが、たいがは「カミのお告げです」ですませてきた。

聖美は兵役のがれのために抽選会に参加した。

ドアの外で泣きわめていていた女が涙をグイとぬぐい、据わった目で男の手を引き「役所に行って離婚手続きするのよ」とホールから立ち去った頃、ホール内で抽選会が始まろうとしていた。

卍

「どうしてこんなことになったんだね」

島田首相は、執務机に置かれた数枚の写真を指差しながら、厚生労働大臣の鎌崎に聞いた。写真には「奈良・クロサクシンタ」「長崎・アンジタクヤ」「釧路・ニレセイヤ」と、異なる地名と名前が書かれたシールが貼れていたが、どれも同じ子供の写真に見える。

「一部のクリニックが、本来、完全オーダーメードであるべき遺伝子調合を

ショートカットして、イージーオーダーにしたためで……」
「予想できなかったのかね」
「なにぶんにも、政府の経済活性策として十年前に行われた規制緩和により、多くの事柄が、自己責任においてなされるようになり――」
「そんなことはどうでもいい。お題目は結構だよ、鎌崎大臣。きみは気がつかなかったのか？　前任者はどうでもよいことなのだよ。前任者に責任をとらせていたら、結局、誰が責任をとるのだ？　日本が今のようになっている責任をだれがとるのだ、誰も責任をとらないことになるではないか？」
「は……」
「わたしが首相として遅まきながら変えようとしているのは、そうして責任を順送りしてきたこの国の体質だ。なんどいったらわかるんだね。ま、いい。とにかく早急に調査したまえ。早急というのは、数日ということだ。数日というのは、五、六日ではなく、三、四日ということだ。クリニックは閉鎖、法律をひっくり返してなんでもいいから、この医師は起訴しなさい。いわなくてもわかっている

とは思うが、個人情報を除き、この事実は完全に――いいか、完全に国民に公開し、当分の間、デザイナー・チャイルドは中止とする。わかったかね」

「はい」

執務室から出て行く大臣を見やりながら、島田はため息をついた。

政治家はなにかというと「子供や孫のために良い国をつくろう、残そう」と有権者に呼びかける。半分は本気だが、その結果は自分で見届けることなどないのだから、いいかげんなものだ。過去の行為には目を瞑り、自分の行為の結果責任は後代に先送りする――政治家も、そして影でこの国を牛耳っていると自負する官僚もおなじだった。

戦争に負けアメリカに占領された機会に、日本に民主主義は育ったが、残念なことにリーダーシップとメンバーシップという重要な項目がかけていた、と島田は考えていた。民主主義にこそ強力なリーダーシップと、磐石のメンバーシップが求められるのにもかかわらずだ。

誰も責任をとらないというゆがんだ社会の中で、政治家は選挙のときだけ有権

者におべっかを使い、あとは知らぬ存ぜぬ。市民も政治家が悪いから、政治が面白くないから、と他人事のように言って、投票に行かない。社会の一員としての義務であるメンバーシップの発揮など考えたことなどないに違いない。それでいて、強力なリーダーシップを持った政治家を待望するなどという。ようするに、自分で考えたり、行動したりするのが面倒なだけではないか。

だから、ちょっときつい言い方、それも、市民ではないだれか、たとえば、日本に敵愾心を持つ近隣諸国を相手に強気な発言を繰り返したり、日本のことなど、軍事基地を貸してくれる地主程度にしか考えていないアメリカに強がって見せるだけで、「発言力」があると人気が出る。まったく愚かしい。

今回のこの事件も無責任な国、ゆがんだ国の病巣のひとつだと島田は思った。

医者はいうだろう「夫婦が子供を望んでいたのだ」と。そして夫婦はいうだろう「政府が行う計画を信じていました。それに、医者もなにも説明しませんでした」と。医者は責任を子供の親に押し付け、子供の親は政府と医者に、政府は医者に責任をとらせる。

いったい、何人の「遺伝子」兄弟が、ことによったら双生児、三つ子が生まれたのだろうか。

卍

「それでは、これよりバースコントロール委員会主催の抽選会を行います」
アナウンスが入り、ブザー音が鳴り響いた。客席の照明が落ち、暗転した舞台にスポットが当たる。その中央にダークスーツに身を固めたちんちくりんの男が立っている。舞台の背景に据えられた大型スクリーンに深夜のテレビショッピングでよくみかける男の顔が映しだされた。マイクを胸の前で抱きかかえるように持ち、観客席を手前から奥、右から左と、無言で眺めまわす。そして右手を掲げると声を張り上げた。
「抽選会に参加されるみなさんに、大変良いお知らせがありまーす」
司会者の登場で静まりかえっていたホールがザワワと波立つ。
「今回の当選数はいつもより一〇本ちかく増えた二五本です。前回の当選の結果

が思わしくなく、二〇本中八本が失敗に終わったための処置です」
本数が増えたというアナウンスを聞いて、ホールからワッと喜びの声が上がった。確率にしてコンマ以下の微増に過ぎないのにみんな自分が当たったつもりになっている。冷静になれば、結果が思わしくないというのは、妊娠に至らなかったケースが多かったということで、流産や不妊という他人の悲しみや痛みの上になりたつものだとわかっただろうが、いまの客席の人々にその余裕はない。
自分のもたらした福音がホールに染み渡るのを待ってから司会者は口を開いた。
「それでは抽選をはじめます。今回、くじを引くプレゼンターを務めてくださるのは、一年前の抽選会で、幸運をいとめたかたたちです。それでは、まず、一桁目の番号を選ぶ山本さんに登場していただきましょう」
ベビーカーを押しながら女性が舞台に現れた。横に立っているのは夫だろう。司会者の前に来ると、二人はひょこりと頭を下げた。
「山本さんが引き当てたくじの結果がこちらですね」
司会者はベビーカーを覗きこんだ。

「かわいい赤ちゃんですね」
「ありがとうございます。五体満足でした。知能レベルは普通です。運動能力が若干平均を下回っているそうです。デザイナー・チャイルドの権利をいただいたものですから、まだ発現していませんが遺伝子段階では、音感に優れているはずです」
「将来は日本、いや世界を感動させる音楽家、アーティストになるかもしれません。大事に育ててくださいね。さ、それでは、十の位を引くのは、杉本さんです。どうぞ、こちらへ」
白い杖をついた女性が舞台の袖から現れた。
「お気をつけてく。はい、そこで止まってください杉本さん。じゃ、こちらを向いて。ところで、今日はお子さんは？」
「ええ、ホールのどこかにいるはずです」
広いホールの一郭が瞬間的に湧き上がった。
「どうして舞台につれてこないんですかぁ」

司会者の口調が段取りを狂わすな、とばかりにぞんざいになる。司会者がつけるイヤホーンのなかでだれかが「余計なことをするな」とわめいている。おおかた演出家が怒っているのだろう。ひよっこの演出にキャリア三〇年の自分が負けるわけがないと、司会の男は無視した。

「わたくし、目がわるいものですから」

「そんなことは理由になりません。ホールの皆さんは、あなたが昨年引いた当たりくじの結果を見たいんです。あなたが手にいれた幸運を目にして自分も同じようにと、会場にお集まりのみなさんは願いたいのです。あなたにはお子さんをみなさんに見せる義務があります」

「わかりました」と、女性がいうと、客席で男が立ち上がり、舞台に歩み寄ってきた。腕に赤ん坊を抱いている。

司会者のイヤホーンの中で演出家が「知らないからな！　勝手にしろ。二度と仕事をさせないぞ」と怒鳴ってた。

舞台に上がった男性の抱いていた赤ん坊は、まばゆい照明を浴びても、顔をし

かめることもなく、泣くこともなかった。
「さぁ、皆さんにご覧に入れてください」
男性は赤ん坊を観客の目に晒した。目があるはずの場所には、かみそりで傷つけたような痕跡があるだけだった。
「耳も聞こえないんです」と、その女性は言った。
ホールは静まり返っている。今日はあくまでも「幸せな家族」を手に入れるための抽選会なのだ。よりによって、「貴種」の家族を強調することはない。司会者はいつもの抽選会のつもりで台本など読んでこなかった自分を恨んだ。
「貴種のお子さんを授かられてお幸せでしょうね」と司会者は、断定するようにいった。
「ええ。政府が全面的に支援してくださるので、何一つ不満はありません」
「そうでしょう、そうでしょう。それじゃ、抽選のほうお願いしますね」
観客はみなツララを飲み込んだように固まっている。客席を覆う鉄板を引き剥がすかのように、司会者は、山本のところへ引きかえし、赤ん坊をベビーカーか

らひょいと持ち上げると、舞台の端まで歩みより、客席に見せた。赤ん坊は身をよじって泣いた。

「あらららーら」と、慌てた様子で母親の手に赤ん坊を押しつける。わざとらしくおどけた顔を見せて赤ん坊のご機嫌を取ろうとする。それでも飽き足らずに「ぼーっと突っ立っていないで、おとうさんもホラいっしょにぃ、あばばばばばー」などとやってみせて客席を笑わせた。これが皆さんを待っている「家族の風景」という印象を植え付け、薄れないうちに残りのプレゼンターを次々と紹介していく。

なんていけ好かないやつだ――聖美は大型画面に映し出される司会者から目をそむけながら思った。男のくせに妙につぶらなひとみは、詐欺師を思い起こさせる。なんでそうなのか、聖実自身にもわからないが、彼の基準では、そうなのだ。遺伝子のせいかもしれない。人懐こい笑顔も、怒ってもいないのに怒った振りをして見せるのも気に食わない。ああいうやつに、自分の人生の一場面を握られるかと思うと、吐き気がすると聖実は思った。もし自分が当選したらあいつは、言

葉や態度で自分のことをいろいろといじくるにちがいない。聖実のくじの番号は九一一九。しかし、兵役を逃れるためには当たらないでくれと願うわけにはいかない。「むう」とうなって聖美は座席に身を沈めた。

「一のくらぁーいぃー」司会者が、プレゼンターが引いた番号札を見つめながら舞台端まで駆け寄る。そして、「一の位はー」と叫びながら舞台を右へ左へ走り、左の袖で止まった。

「一の位は、六です」

「あぁー」という声がホールに満ちた。

耕一は自分の手札を見た。一の位は「六」だった。

「さ、つぎは十の位です。杉本さんお願いします」

目の見えない杉本はくじを指先で探るように一枚引いた。司会者に渡しながらその指が番号を確かめるように、札の表面を指でなぞっている。

「十の位はー」

司会者は杉本から受け取ったくじをじーっと見つめている。

ホールの誰もが、また、思わせぶりに引っ張るのだろうと思った。だれもそんなことをしても喜びはしないのに、というホールの空気を読んだのか、振り向きざまにあっさりと宣言した。

「一」です。

ホールは舌打ちの音、息をのむ音、イスの上でのけぞる音、膝を打つ音――人間が発する様々な音がまじりあって一瞬騒いだ。早くも脱落したものは、残りのくじが始まるまでいすにふんぞり返り、天井を見つめているか、うつむいているかのどちらかだった。

「最初の当選者は、〇・六・一・六です。どこにいらっしゃいますか」

司会者は全部の札がそろったところで、目の上に手をかざし芝居がかったしぐさでホールを見まわしている。ホールに集まった人々も右に左に身をよじって幸運な人間の顔を探している。

卍

鎌崎厚生労働大臣に責任うんぬんとえらそうなことをいった首相の島田だったが、遺伝子使いまわし事件の責任という点では、島田こそ責任をとるべき人間なのかもしれない。デザイナー・チャイルドを解禁したのは島田の父だった。二〇年近く前のことになる。

父もまた首相を務めた。

二一世紀初頭の日本は少子高齢化の影に怯えていた。政治家や官僚はただ、年金が破綻するの、このままでは「純粋」なニッポンジンがいなくなると、危機感を煽った。子供たちは現役世代の借金を返す重要な労働力だ。文楽首のような顔をした、時の厚生労働大臣は公務員の残業を禁じたり、公務員宿舎の電気を週二日早く消してしまうという奇策を打ちだし、世間の失笑をかった。挙句の果てには、お見合い事業を公共事業として立ち上げたりもした。

しかし国民は醒めていた。人口を増やしても国民が幸福になるという保障はどこにもなかった。国民の疑問に答えずに、コンドームなしのセックスを奨励する役人の脳タリンに国民は辟易していた。

当時、島田は父の派閥の議員のもとで秘書として修行を積んでいた。議員が国会で行う少子化問題に関する質問書を作成する際に、島田の友人で遺伝学者の伊藤に意見を求めたことがあった。

「少子化に歯止めがかからないのは、遺伝子のせいだ」

子供のころから神童といわれていた伊藤は島田のいれた茶をグビと飲み干して言った。

「考えてみろ、島田。お前が一所懸命努力して、政治家になり、やがて天下を取ったとしてもだ、お前の子供は首相として生まれてくるわけではない。最初からやり直しだ。しかもその遺伝子はおまえとたいして変わらないときている。おまえでさえそうだ。ごくふつうの人間してみたら、そうした現実を知ることは絶望だぞ。ヒトゲノム解明のおかげで遺伝子は嘘をつかないってことを、世間はみな知ってしまったのだから」

「トンビがタカをうむってことも――」

「お前の目の前にいるのは誰だ？　落語家か呪術師か。科学者の言うことを信じ

てくれるのなら、蛙の子は蛙だ。もしいささかでも疑問があるなら鷹を生んだ鳶を連れてきてくれ。あ、いっておくが、鳶職に就いた息子を産んだお鷹さんっていうのはナシだ」

「わかったわかった。だけど、それと少子化とどう関係があるんだ」

「面白くないんだよ。自分と大差ないものを育てたところで、面白くないだろう。手間暇かけてそんなことするぐらいなら、自分の出世や栄達を追及したほうが楽しいとは思わないか」

「子育ての喜びと自分の出世から得られる喜びは別のものだ」

「人の話を聞いてないなぁ、さすが政治家の卵だけある。前途有望だ。だから、子育ての喜びってものが喪失しているんだよ、現代は。子供を生むといくらかかる？　学費は食費は医療費は？　それでいて、子供は老後の面倒は見てくれないし、年金だって払ってくれない。できあがるのは自分とちょぼちょぼの人間だ。国民としちゃ、子育てをもっと楽しみたいわけだ」

「面白いとか面白くないとか、子供はペットじゃないんだぜ」

「ペットのどこが悪いんだ」
「悪いわけじゃないが……。まぁ、百歩譲ってお前の言うとおりだとしよう。どうやったら子育てが面白くなる」
「簡単だ。子育てに夢と希望を加えてやれば良い。両親の遺伝子をちょっと操作して、あなたのお子さんはもしかしたら芸術家になるかもしれない遺伝子を入れておきましたとか、美男美女の間にできるお子さんですから容姿は保障付きですから、美声の持ち主となるような遺伝子もいれておきましょう。それともスポーツ選手がよろしいですか？　なんて夢を持たせれば、どうだ。俄然子育ては楽しくなるだろう。一攫千金を夢見て子育てに励む輩だって出てくる」
「そんなに簡単に行くもんか。それじゃペットどころじゃない、おもちゃだ」
「だ、か、らー、それのどこが悪いんだ？　子供をつくるにはそれ相応の動機ってものが必要なんだ。むかしは、子供をたくさん生めば一人ぐらいは親孝行な子供ができるだろうって期待した。高度成長期はそれでよかった。でもいまは時代が違う。親も子供も持つべきものは全て持っている。満足しているんだ。不況だ

なんだかんだといったって世の中思ったほどにはあれちゃいないだろう。そんな親にとってはさ、子供はいていなくてもいいパーツなんだよ。そんな奴らに子供を作らせるには、子供を育てると得したって感じさせることさ」
「子育ては損得じゃない、っていっても反論するんだろうな」
「その通り。科学の真理が政治家の舌先三寸ごときに負けるわけがない」

卍

「さ、いよいよ最後のくじです。今度はいちどに抽選しましょう。よろしいですか。さぁ、どーぞっ!!」
プレゼンターが我先に番号札を選んで司会者に渡す。
「泣いても笑ってもこれが最後。いいですか。お手もとの番号札をよっくみていてください。それじゃいきます。九――」
どーっとホールが揺れた。
「九、一、一、九。九一一九のかた、さーどうぞ、舞台へ!!」

聖実は気絶しそうになった。
舞台への階段をあがろうとすると、司会者が舞台端までやってきて、聖美をエスコートするように肩膝を折り曲げうやうやしく手を差し伸べる。その手を無視して舞台に上がると予想通り司会者が肩を抱いてきた。整髪料のきつい臭いがますます聖実をイラつかせた。身をよじるようにして肩から手をはずした。
「足元がふらついて、顔色が悪いですが大丈夫ですか、お嬢さん」
「ばか、男だ。このエロオヤジ」
小さい声で、司会者にだけ聞こえるように言ったつもりだったが、マイクは聖美の声を拾っていた。会場がくすくすと笑っている。ザマミロと思ったのもつかの間、満面の笑みを浮かべた司会者は、「あっらー、ごめんごめんご。そっちの気はないんだけど。いやーまいった。ほんとうにー？」
そう言いながら、しなをつくるように頬の横に上げた手を伸ばして聖実の胸をむずとつかんできた。ご丁寧に掌をワシワシしながら「あ、ほんとだ。ごめん」
めげないやつだ。聖実は思考を停止し、すべてをゆだねた。司会者はわかって

いてやったのだと気がついたからだ。聖美のプロフィールは抽選事務局から無線で司会者のイヤホーンに伝えられているはずだ。聖美がおもちゃにされて、緊張とあきらめと悲嘆に満ちていたホール内に笑いが渦巻いていた。

卍

少子化阻止に万策尽きた政府は、折柄のヒトゲノムの解明の進展と遺伝子操作技術の開発を背景にデザイナー・チャイルドの解禁に踏み切った。体細胞を使ったクローンなどより遙に簡単で安全な技術だったこともあるし、遺伝子のデザイン技術を世界に先駆けて実施することで、優秀な科学者を育て、この分野の特許を独占しようという戦略もあったようだ。

「島田、俺様のアイデアを盗んだな？　飯食わせ、酒飲ませろ」

伊藤が事務所に押しかけてきた。

「冗談言うな。あんな馬鹿げたことだれがやろうと思うものか」

「お前の親父だ」

「……」

「それにしても大馬鹿ものだ。一〇年も経たないうちに化けの皮がはがれるに決まっている。お前も親父の跡を追って宰相を狙うんだったら、今のうちから考えておいたほうがいいぞ。尻拭いの方法をな」

ところが国民の期待は高まった。ことによったら、アイドルや世界で活躍するスポーツ選手と同等の遺伝子を自分の子供が受け継ぐかもしれない。こんな楽しいことはないではないか。自宅でイチローや松島菜々子が育っていくかもしれないのだ。

伊藤の言うように期待は子育てに「楽しみ」をもたらした。下がる一方だった出生率は、デザイナー・チャイルドの解禁とともに徐々に上昇に転じた。

雑誌やテレビはデザイナー・チャイルドの特集を組み、産婦人科は一躍、花形職業になった。文字通り門前市をなす状況で、老若男女、未婚既婚をとわず、自分好みの子供をもちたいと願うものが列をなした。産婦人科はいまでは、高額納税者の常連だし、どの町にも“遺伝子御殿”がひとつやふたつある。

島田も議員秘書として、有権者から頼まれる有名産婦人科への口利きが仕事だった時期がある。

そういえば――。島田はデザイナー・チャイルド狂騒劇に自分も参加した一幕を思いだした。

その日、いつものように議員の地元後援会事務所で仕事していると、婦人が一人訪ねてきた。夫は後援会の有力者でもあり、地元の名士の一人に数えられる男だった。彼女も後援会婦人部会長を務めている。見知った顔だったので、愛想よく椅子を進めたが、婦人は座るなり泣きだした。

「助けてください」

「なにがどうしたのかいってくださらないと、助けようがないですよ」と、島田は微笑みを添えてやさしく言った。

「これまで通っていた産婦人科がもうこないでくれというのです」

「はー」

島田は目の前の婦人の悩みを理解しかねたが、産婦人科という言葉で思い当

たった。そういえばこの女性は不妊治療を受けていた。
「夫も義父も義母も子供を作れなどとは一言も申しません。ですが、それは、あまりにも当然なことだからなのです。特別なことをしろといわれているのではありません。だれもがやっていることを求められているだけなんです。ですが、それが私にはできないのです」
継ぐべき名誉も財産もある名家に嫁いだ彼女にとって後継ぎは至上命令だった。男は身持ちが固く、後援会のパーティーでも、「こどもは授かりものだから」などと古風なことを言って、妻をかばっているのを島田も耳にしたことがあった。それだけに彼女にとっては生活の九九パーセントまでが、後継ぎの出産のためにあるのだった。
「失礼ですが、お子さんができないのは、ご主人に原因があるということは？」
「いえ、検査ではお互いにこれといった問題はないといわれました」
彼女の通ってた産婦人科はデザイナー・チャイルドが解禁になるまでは、不妊治療で全国的に有名だった。子供を持ちたいのにもてない人で、金に糸目をつけ

ない人々もしくは、子供を持つことが自分たちの人生の目的だと信じて疑わない人々を対象に商売をしていた。少子化――産まない時代の中で、子供を持ちたい――産むことにこだわる人を対象にした不妊治療は商売になった。しかし、デザイナー・チャイルドの出現が、不妊治療など吹き飛ばしてしまった。産むことを娯楽とする時代では、苦労しなくても産める人間のほうが金になる。医者も手間ばかり掛かる不妊治療から手を引き始めた。不妊治療はあっけなく捨て去られた。

あのとき島田の目の前で泣き崩れた女性もその犠牲者の一人だった。

こうした風潮を生みだしたデザイナー・チャイルドに対して、評論家の中には、生命の玩具化だと警鐘を鳴らすものもいた。家族が崩壊すると危惧する声もあった。しかし、いっぽうで、　コウノトリや運に任せる出産ではなく「自分好みの赤ちゃん」というのは、なにかにつけ自己中心的といわれる世代の圧倒的な支持を受けた。ゼロからの出発でもないところが、お得な感じを持たせたし、自伝などでスポーツ選手の育て方のマニュアルが手にはいることもマニュアル世代の受けがよかった。

卍

「当選されたみなさーん。おめでとうございます」
司会者が、当選者に対する拍手を観客に強要している。
「そこの奥さん、そんなにがっかりした顔しないのぉー。こんつぎはさぁ――」
司会者がホールに向かって与太を飛ばす。だが、決して「次はあなた」とは言わない。言質をとられて、訴訟にされかねない。
「さ、当選された皆さんも浮かれてばかりはいられません。皆さんの両肩には、国家的事業がのしかかるんですからねっ。わたしは、ちょっと太ってはいますが、あなたたちへ赤ちゃんを届けにきたコウノトリです。でもここから先は、自分たちで運命を決定してください。この箱の中には、デザイナー・チャイルドの権利をもらえるくじが五本入っています」
司会者は自分が生まれてくる子供の面倒を見るわけじゃないから気軽なものだった。

彼自身は抽選会が導入される前に子供をもった。二〇年前、デザイナー・チャイルド全盛時代で、彼と妻も迷わずオーダーメードした。容姿端麗で頭脳明晰、スポーツ万能という今考えればいいかげんなオーダーだったが、医者は「そういうかた、多いですから気にしないで。じゃぁ、適当に見繕ってやっておきましょう」といった。

酒の肴を注文したわけではないのだから適当に見繕うはないだろと、一瞬ムッっとした彼の顔色を見て医者は薄ら笑いを浮かべながら「ご不満や不安があれば、後日もうすこし明確なご希望をおもちになってお越しいただいても結構ですよ」という。

この日、この医者に会うまでにどれだけ待ち、どれだけコネをつかったか。それを思うと「よろしくお願いします」としか言えなかった。彼らの子供は両親の遺伝子を片鱗さえ受け継いでいなかった。

子供は無事、健康に育った。容姿は端麗とは言えないが、整った部類に入っていた。頭脳も飛びぬけていなかったが、トップグループに入ったり出たりしてい

た。スポーツもおしなべてこなした――まさに万能だった。つまりは、ごく平凡な人間ができあがったということだ。自分に似ていない。妻にも似ていない。奇妙な生き物だった。まったく赤の他人かといえばそうではない。家族ではあるが、どこか他人の匂いがする。遺伝子なんて知らなければ良かった。

「さぁ、心の準備はいいですか。それでは皆さんの赤ちゃんに会いに行きましょう」

司会者は抽選箱をガサガサ揺らしながら、当選者に向かい合った。

卍

デザイナー・チャイルド導入に際して、どうしても政府が許さなかったことがある。それは、個人を特定した「ブランド」遺伝子の売買と性染色体の操作だった。

遺伝子も天賦の才能のひとつであり、それをつかって資産形成してなにが悪い――という論理も成り立った。が、「一〇〇〇人の美男美女がいても国は美しくならない。一〇〇人の天才が産まれても良い国にはならない。一〇人の名将がいて

も、万人の将兵がいなくては国が成立しないのだ」と島田の父は一歩も譲らなかった。

この発言に対し「差別的言動だ」と非難の大合唱が起こった。

しかし、島田の父はマイクを突きつけ、カメラを振り回しながら迫るマスコミに言い放った。

「諸君の中で、マスコミ人になりたくて生まれてきた人がどれだけいるかね。いやしまい。子供のころは、本当は医者になりたかった、弁護士になりたかったという人もいるんじゃないかね。もしかしたら、政治家になりたいと今も思っている人もいるはずだ。しかし、その多くはなりたいものになれないのだ。ちがうかね。君たちの多くは高学歴だ。それでもなれないものはなれないのだ。それが現実だ。もし、特定の才能をもつ個人の遺伝子をブランドとして売りだしたとき、その夢がかなわなかったら、だれが責任をとるのだね。まず、その前に、その夢って、だれのものだね。生まれてくる子供のものじゃないだろう。生まれてくる子供は自分の夢すらもてないのかね。それが自由な個人か？　自立した個人か？

表現の自由をもった個人か？」

テレビでマスコミに囲まれる父を見ていた島田は、なにもメディアを敵にまわすことはないのにと思った。

だが島田の危惧とは裏腹に、世論はメディアについていかなかった。

もうひとつ禁止されたのが、第一子における男女の産み分けだ。第二子以降は許可された。実は島田も、第二子はどうしても女の子がほしくて、デザインしてもらった。ほかにも容姿や才能などについてのオーダーも聞かれたが、断った。容姿など整形でなんとでもなる。才能をカスタマイズした子供が自分の子供とは思えない気がした。自分と妻の遺伝子を完全に否定することはやりきれなかった。自分の好みの子供、それはペットとしか思えなかった。

そうして、二〇年経った現在、二・〇一まで回復した。この回復は日本の奇跡と呼ばれている。

しかし、デザイナー・チャイルドに問題がまったくなかったわけではない。

島田が覚えているだけでも、ダンサーとして活躍する日本人の両親がダンスに

秀でた才能を育てるために「黒人の子供」をつくったこと、五感の一つを最初からなくせば、ほかの感覚が研ぎ澄まされ、芸術家として大成するかもしれないという理由で「盲目の子供」を作ったクラッシックファンの両親、ゲイになる子供をつくったゲイの両親がいた。

こうした無知で自己中心的な親の都合で作られた子供の末路が幸多きものではないことは容易に想像できた。

生まれてきた子供があまりにも自分たち両親に似ていないからという理由や、マニュアル通りに育たないからという理由で育児を放棄する事件も起きた。

家族とは何か――デザイナー・チルドレンは家族の変容を余儀なくした。家族は「血」のつながりによって否も応もなく組み合わされるユニットではなく、自由に選択できるものとなった。デザイナー・チルドレンは目的を持たされて生まれてくるため、家族はその目的のために集まる組織となった。目的から外れることは家族を捨てることにつながり、なんとなく家族をするということが許されなくなった。

だが、遺伝子デザインがもたらした最大の弊害は、インセスト・タブーがなくなったことだったかもしれない。人類が遺伝子を知ってしまったことの悲劇だ。

実は最近はデザイナー・チャイルド熱も醒めつつあった。この二〇年に紀代の天才、スーパーアスリート、傾城の美女が続々と誕生したという話はなかった。

「お前知っていたのか？」と遺伝学者の伊藤に聞くと、「当然だろ。子供の遺伝子が良くても親の遺伝子はそのままだからな。親の遺伝子が嫉妬するんだな。だから、結局は親以上にはなれない。遺伝子が良くても、多くの子供は親なりにしか育たないということぐらい、みんな知っているもんだとばかり思っていたよ」

今回の遺伝子使いまわし事件で、デザイナー・チャイルドの中止が長引いたり、禁止になったりしたら、国民は騒ぎ立てるだろうか。政府の危機管理がなっていないとなじり、また、少子化がはじまってしまうのだろうか。

もともと、子供を持つなんてことは、偶然意外の何物でもなかったはずだ。自分で遺伝子を選び、対価を払う。出産は消費行為になった。だが、市場における消費者の「自由選択」が幻想に過ぎないように、出産のオーダーメードの自由も

幻想だった。
――それだけのことに気がつくのにえらく時間が掛かったものだ。
オヤジの後始末を息子がするのも遺伝子のせいだろうかと島田は苦笑いを浮かべた。

卍

聖美は舞台の上で時間が過ぎるのを待っていた。
司会者はあいかわらず、エンジン全開だったが、客席はしらけている。観客はすべてはずれくじなのだから仕方ない。はずれた人々もすべてが終わるまで帰れない。当選者だけを別に帰すと、はずれたことを妬んだものに襲われたり、当選者の懐を狙ってダイレクトメールを送り付けたりと、迷惑行為があとをたたないからだという。
デザイナー・チャイルドの権利獲得を掛けて聖美が最後のくじをいひいた。
司会者が持つ筒の中に一本残っている棒を引いた。先っぽに汚ない手書きの字

で「七」と書いてある。聖美はこの番号があたりなのかどうかわからなかった。ただ、なんでこんな原子的な方法でくじ引きをするのだろうと思っていた。

「さぁ、それではデザイナー・チャイルドの権利を得た方は、四番――」

聖美の横にいた夫婦がガッツポーズをしている。そんなに嬉しいことなんだろうか。遺伝子をデザインするって何をデザインするんだろう。おれならぜったいに知能だな。あとは、芸術のセンス。これだけは時代が変わっても評価のブレが少ないからな。

「なにをデザインなさいますか？」

「えー、なんだろう？　顔とか？　あと、指が長いのが」

何考えてんだろうこの夫婦。

聖美の七番ははずれだった。聖美はくじを胸ポケットにさすと客席を見まわした。自分が子供を持つ権利を引き当てたといっても、実感がもてない。芝居に出演しているような気分だ。男の自分が出産するわけではないのだから、どうするんだろう？　頼めるあてなどない。聖美のようなケースではどうなるのか、自分

のことながら興味が沸いてきた。
子供はどうやってこの手にわたされるのか？　だれかの腹の中で大きくなっていくのをビデオやバーチャルな方法で確認させられるのか。それとも、ある日突然、子供がデリバリされるのか？　そのの前に生まれてくる子供は自分の家族なのか？
聖美は考えるのを止めた。聞かなくてもきっと司会者が喜んで教えてくれるのだろうとおもったからだ。

卍

「で――」
首相執務室で、島田首相の前に厚生労働大臣の鎌崎が書類を手に直立していた。
「はっ、調査の結果、遺伝子の使いまわしは、ひとつのクリニックにとどまらず、じつに多くのクリニックで行われていたようです」
「大臣、ちょっと待ちたまえ。ようです、とはどういうことかね。確信できない

ことなのかね？　調査が完了していないのなら、帰りたまえ」
「いえ、失礼しました。複数のクリニック――せ、正確には一八ヵ所で行われておりました。それらクリニックでは、その事実を隠すために記録を改ざんしており正確な数は把握できていませんが、出生した子供の数からすると、これまでの二〇年間で五万人はくだらないかと……」
「全部が同じ遺伝子なのか」
「いえ、五万人のうちまったく同じ遺伝を持つ集団は最大でも一〇〇人程度と思われますが、親戚関係になるような遺伝子となると、数千から万の単位になることも――」
息を一気に吐いた島田の体がちぢんだ。
「なぜ、こんなことになったのだろうかね。もちろん、私の父が、デザイナー・チャイルドを解禁したことに端を発していることは否定しない。だがね、なぜ、多くの人々が同じ遺伝子を求めるのかね。同じ遺伝子への注文がなければ、医者もこのような手抜きはしなかっただろうに」

「みな一様に、男だったら、見目麗しく背が高く、スポーツ万能で成績優秀、女だったら、容姿端麗、性格温和、歌がうまいか芸術的センスに優れているなんていう、具体的なようでじつは大雑把な注文をしたからだと思われます」
「われわれの政策にはあーだこうだー文句をつける国民というのは結局はその程度のものなのかね。そんな程度の国民に文句を言われるわれわれもわれわれだが」
「いえ、そこまで卑下されることはないとおもいます。結局、この少子化の進展の減速、出生率の向上は、デザイナー・チャイルドというおもちゃが流行した結果なのだと考えるべきではないでしょうか。たまたま、そのおもちゃが、われわれと同じように生きていた」
「子供はおもちゃかね」
「わたしはそうは思いませんが、デザイナー・チャイルドを持つ親にとっては、そういう面もあるのではないかと」
鎌崎大臣はハンカチで額の汗を拭った。

卍

司会者が抽選会のまとめに入った。

「きょうここにお集まりのみなさん。特に、抽選にはずれたかたに注意しておきます。いいですか、抽選にはずれたからといって、自暴自棄になって勝手に子供を作ってはいけませんよ。かならず子供を作るチャンスはやってきます。セックスと受胎は別ですよ。一時の激情と色情に身を任せて、子供を作っても何ひとついいことはありません」

司会者の言っていることは冗談ではなかった。抽選会にやってきているのは、半ば子供を持つつもりになっている人たちだ。女性の中には想像妊娠寸前の人もいる。期待が大きいぶんだけはずれたショックは大きい。当選したらすぐに帰宅して子作りに励むつもりでいたのだから、はずれた憂さ晴らしで「できてしまった」子供はあとをたたない。

「自由受胎した子供を闇出産しても、利益は何もないですよ。闇出産できる条件はお金持ちであることです。しかも闇出産も二度重ねると、生まれてきた子ども

が抽選会に参加する権利がなくなります。お金持ちでもないのに、どうしても管理受胎でなく自由受胎したければ、日本から出国することです」

しかしそれでは何の得もないのだ。海外に二年以上生活していたことが証明できないと、帰国してから特典が受けられない。

「闇出産というと言葉が悪いですね。取り消します。自由受胎に基づいた自由出産、これは政府も認めています。だけど、そうして生まれた子供には、管理受胎と管理出産によって授かった子供やその保護者が享受できる恩恵は何一つありません。受験の時だって、管理出産の子供は優遇されるんです」

司会者は「脅し」をもう一押しするために声のトーンを一段下げた。

「よく考えましょうね。自由受胎の挙句、堕胎するなんてことになると、これは犯罪になります。男性も女性も二度と子供をもつ権利を剥奪されますよ気をつけてください。だから奥さんもご主人も、パートナーの浮気には気をつけるように。浮気の挙句に自由受胎。それだけでも大変なのに、その後、出産したら、養育費用がベラボウだ。堕胎したら、なんの罪もない、あなたまで子供をもつことがで

きなくなる。離婚すれば別ですけどね。そうそう、浮気な彼と別れたければ、彼が使っているコンドームをちょいと針で――、おーっとあぶない。これ以上しゃべったら犯罪だぁ」

だれも笑う観客はいない。

「とにかく今回、当選した人たち。おめでとう。でもね、これで終わりじゃないですよ。これからが大変。子供を産んで、育てて、家族を作るんだから、そりゃ大変。死ぬまで大変が続くんです。がんばってください」

確かに大変そうだなぁ、と聖美は他人事のように考えていた。それよりもいまの関心事は、だれが自分の子供を生んでくれるのかということだった。

卍

「親の都合でペットやおもちゃのように育てられた子供たちのなかから、この国を治めるものが出てくるのか」

「そのことに関しまして、もうひとつご報告があります」

島田の慨嘆をたちきるように、大臣の影のようにたっていた官僚が口を開いた。何度か執務室へもきているが、何度聞いても名前を覚えられない。覚えようという気になれない人物だった。

「どうせろくなことではないのだろうが、言ってみたまえ」

「この冬、インフルエンザで死亡する子供が例年になく多かったということはお聞き及びかと思います」

「ああ、一九八人の子供がなくなったそうじゃないか。インフルエンザの型がこれまでと微妙に変化したせいで、ワクチンも特効薬も効果がなかったと聞いたが、違うのか」

「は、今回の事件の調査の過程で判明したことなのですが、死亡した子供の九割が同じ遺伝子を持っていた疑いがあります」

「なんだと。それでは、特定の遺伝子を持った子供だけが、インフルエンザにやられたのか？」

「はい。首相のご指摘のように、インフルエンザは微妙に型が変わっておりまし

たが、それは、例年の変化の幅の中に収まるものだそうです。事実、問題の遺伝子を持たない子供はワクチンや特効薬が効果をもっていました」

島田はかねがねこの男の顔、どこかで見たことがあるとおもっていたが、いまようやくその正体がわかった。埴輪だ。無表情で奥底の知れない目――。その埴輪が言葉を継いだ。

「同じ遺伝子を持った生き物はおなじ病気にやられる可能性が高いのは常識です。多用な遺伝子を保持しておくことが、人間が生き物として生き延びる手段だった。その生殖が、いま、画一的になり、多用な人間ではなく、同一の規格化された人間が多く生まれようとしているのです。このままでは、遠からず、日本人は滅びます」

「首相!!」

「鎌崎君。なにもそんな大声を出さなくても、事態の深刻さを私は理解しているつもりだ。同じ遺伝子、親戚関係にある遺伝子同士が何も知らずに出会って、子供を作ったらどうなる？　その結末を私が理解できないでいると思うのかね。問

題は、事態の原因を追求し、その元を遮断することだ。一刻も早くデザイナー・チャイルドを禁止しなくてはならない。それにそこの――」

「高橋です」

「高橋君、ひとつ警告しておこう。そのような重要なことをなぜ大臣に報告しないのだ。一官僚に過ぎない君の口から報告を受けるとは心外だよ」

予想外の叱責を受けて目を見開いている高橋を一瞥すると、島田はいすをくるりと回転させ、窓の外を眺めた。午後の早い太陽光が窓越しに島田の顔をチリチリと焼いた。

「想像力に長けているとか、万物の長だと自画自賛するが、所詮、人間のやることなどこんなものなのか――。デザイナー・チャイルドは、本日の午後五時以降無期限で中止する。三時に緊急会見を行う。デザイナー・チャイルドを扱う各病院にはメールで通達、かならずリプライをとること。五時までにリプライをよこさない病院は、病院名を明らかにすること。国民に中止の理由をすべて明らかにし、違反したものは、病院も患者も一切の保障措置を得られないものとする。さ

らに、この中止措置により経済的損害をこうむる人々への補助制度の検討、もしできることならば、補助金などではなく、まったく別の手段が行えれば良いのだが、さっそく検討するように。保障・代替措置については後日、国民に対して発表する。以上だ」

卍

聖美は病院のベッドで心電図を取られていた。規則正しい機械の音は、いつかそれが止まるのではないかと思い起こさせて聖美は嫌いだった。

聖美の引いたくじは、ごく普通の自由受胎だった。夫婦ならば帰宅して心おきなくセックスすればいいのだが、聖美は独身が条件。あわてて結婚するわけにはいかないし、そのあてもない。だから、ご丁寧にもお見合いをさせてくれるという。そのための検査入院だそうだ。病院で見合いとはぞっとしないが選んだ以上しかたがない。

細面で目も細く、首も、指も細い、ようするに身体中が何もかも細い、マッチ

ング・カウンセラーが聖美の前に座っている。名札には太海とある。きっとコンプレックスになっているに違いないと聖美は思った。二人の間にはコンピュータが一台ある。

「コンピュータには数万人の登録者がいます。かならずあなたの好みの人が見つかりますよ」

「そうかなぁ」

「そうです。長沼さんの周りで結婚した人いますか？　その人はいったい何人の集団のなかからパートナーを選びました？　このコンピュータに登録されている人よりは遙に少ないでしょう？　出会いなんてそんなもんですよ」

国家管理の見合いか――さしずめ太海は国家公認遣手婆だ。

「えーと好みは、僕より五センチ身長が低くて、巨乳はいやだけどプチ胸もいやだ。え？　芸能人で言うとかぁ。……、３キロ太った沢宮えりだ。もっとも顔は三秒以上みていられればオッケーだよ。性格はグチャグチャしていないやつが良い。え、わかんない？　具体的にって言われてもさ。うーん。一足す一は二だろ、

そのときさ、なんで二だろうって考えるんじゃなくて、三かもしれないってまじで二秒くらい考えるやつ。わかる？　わかんなきゃいいよ。テキトーでいい。あとは、スポーツ万能はだめだ。スポーツ好きは良い。でも、スピード狂はだめ。空飛ぶのが好きなやつもだめ。好みがうるさいって？　おまえが聞いたんだろうが。手紙の宛名がきれいに書けるやつで、できれば、三味線とピアノが得意な人が良い。キャベツの千切りができて、きんぴらごぼうがつくれて、うまいおでんが作れるやつ。以上だ」

いるわけないよなぁーと思いつつ、待つこと一〇秒。コンピュータはあっけなく答えをだした。日本に一人。おまけにこの町にいるときた。

「会っていただきます」

「だけど相手がいやだっていったらどうなるのさ」

「コンピュータの記録では、マッチングＯＫになっています。いま、本人の端末にメールを送っていますから……」

太海はディスプレイに見入っている。天井の蛍光灯が低くうなっている。ドア

の外でガラガラと音がする。点滴台を引っ張ってトイレに行く患者だろう。窓の外に救急車が止まり隊員がなにか大声でわめいている。
「あ、返事がきました。これから、来るそうです」
「うわ、まじで。これから、見合い。しかも、まじ結婚を前提としたってやつでしょう。親とか呼ばなくていいわけ？　あれ、おれ親いないか？　はははは」
聖美は、自分が事態の展開についていけずに少しハイになっているなと感じた。
「あなた成人でしょう。不要です。それに勘違いされてますが、あなたはシングルファーザーとして登録されていますので、結婚はできません」
「できませんて、一生？」
「いえ、お子さんをもったあとで、いくつかのパターンから選択できます」
「あ、そ。ところで、本人がきたら聞きづらいんで先に聞いておくけどさ。この自由受胎ってのはさ、あのさ、そのさ」
「ひごどこさ」
「……」

「失礼しました」
太海の薄い口がわずかに弓なりになったところを見ると苦笑したらしい。
「そのさ、いいわけ？」
「なにがですか」
「だからさ、その、なにしちゃっても。受胎に先立つものをなにしてもさ」
「受胎に先立つもの……ですか？」
「あーーーーーー。だから、セックスしてもいいの？」
「べつに私はかまいませんけど。ご本人がなんとおっしゃるか」
「ということは、体外受精が条件てわけじゃないんだね」
「はい、もちろんです」
「うぉー。頭が爆発しそう」
「あの、もう少し説明をもうしあげてよろしいでしょうか」
「おお、なんでもどうぞ」
「自由受胎シングルファーザー・バージョンの選択肢は次のとおりです。管理受

胎を経て妊娠期間の同居を経て出産の段階で子供を引きとる――これを産褥死バージョンといいます。つぎに、出産までは同じで、産後一ヶ月でやはり子供を引きとるケース。これは育児ノイローゼ失踪バージョンです。最後は、妊娠、出産を経ずにいきなり子供が届けられる身に覚えがないバージョンです。どれになさいますか」

「どれにするって……。ポテトはいかがですか、お飲み物はいかがですか、みたいに聞くなよ。えーっと、最初の二つは、妊娠期間は一緒に暮らせるわけ？」

「そうです」

「まじ」

「まじです。政府はうそをつきません」

「それじゃ、二番目にする。あ、ちょっと待って。それぞれに、なにか条件がないの？　税金が掛かるとか、自己負担金が生じるとか？」

「とくにありません。あなたの場合、単身者ですから保育訓練が加わります。それだけです」

「それだけ、ですか」
「それでは、お相手がみえましたので行きましょう」

卍

いまや遺伝子使いまわし事件で、日本中が遺伝子パニックなっている。テレビも新聞も雑誌もあらゆるメディアが事件を取り上げ、日本人の未来に与える影響を書き立てるというよりもがなりたててていた。海外のメディアも事件を取り上げ、日本の危機管理意識の低さを笑いものにした。それに過剰反応した自称愛国的政治家が、官僚をスケープゴートに仕立て上げようとしていた。

さらに悪いことに事件は思わぬ展開を見せた。

遺伝子デザイン・クリニックのなかに、狂信的な信仰集団の教祖の遺伝子を使った事例が発見された。これは予想されなくもない事態だったが、国民をさらに驚愕させたのは、日本を敵とみなす国家の指導者の遺伝子を使ったクリニックがあったことだった。国民は怒り、政府を糾弾した。

その渦中で両親に遺伝子の出自に疑念を持たれた子供が捨てられたり、殺されそうになった子供が親を殺すなどという凄惨な事件が頻発した。

「これをみたまえ」

島田は一緒にテレビを見ていた厚生労働大臣に新聞の切り抜きを示した。九歳の男の子の投書だった。

ぼくには姉妹が十人いるそうです。ぼくはその人たちのことを知りません。将来、その姉妹と出会って好きになっても、結婚できないとお母さんにいわました。ぼくの姉妹だからぜったいに可愛くて優しいはずなのに、お嫁さんが十人も減ってしまうなんて哀しいです。

「まずはデザイナー・チャイルドの住所録をつくること。そのうえで、本人に対

し、遺伝子情報を持たせる。そうしないと、将来、ほぼ同じ遺伝子を持った兄弟姉妹が出会って結婚するということもありえる。そのときに起こる間違いを防がなくはならない。そうした二人が愛し合う事態になったときのことを考えると悲しいことだ」

「首相、それには莫大な支出が」

「防げるとわかっていることを未然に防がなくて、なんの国家かね。四の五の言わずにやり給え。それから――」

厚生労働大臣の脇に控えていた法務大臣に向かって島田は言った。

「デザイナー・チャイルドの被害者救済機関を設置すること。また、クリニックから遺伝子情報や治療記録を引きあげ、国家管理の元に封印する法的措置を取ってください。これ以上、捨て子や子殺しが起こってはならない」

「事実を封印したところでそうした事件が減るわけではないとおもいます。かえって疑心暗鬼になるのではないでしょうか」

「……どうしろと？」

「放っておくんです。遺伝子による差別はデザイナー・チルドレンが解禁された二〇年前からすでに禁止されています。それに違反したものだけを処罰すれば良いのです。それに全ての家族がそうした遺伝子を持った子供を憎んだり虐待するわけではないでしょう」

「独裁者の遺伝子は、信奉者する医者が勝手にやったことで、組織的な背景は薄い。遺伝子を組み込まれた子供の多くも、意図的な育て方をされていない。だが、問題は、狂信的教団のほうだ。あきらかに何人かの子供は信徒によって帝王教育をされていると言うではないか。それでも放っておくのか」

「そうです。首相はその子供や家族をどのように処断されるおつもりなんですか？　危険人物準備罪ですか？　それでは、子を殺したり捨てた親と変わりませんよ。この国は自由な国です。その子供が教祖の遺伝子を持っていなくても、他の子供が教祖として育てられただけです。独裁国家の指導者の遺伝子を持つ人間が将来この国を治めることもあるかもしれません。だからといってなんだというのですか？　それを選ぶのは、まったく違う遺伝子を持つ国民です。現存する独

裁者と同じ遺伝子を持っているから国を売るとは限らないではありませんか。それとも、これはあなたの分身だから貴国に返すとでも言うのですか？　この国の人間、日本人として生まれ育った人間を捨てるのですか」
「そういわれると辛い。ところで日本人というのはなんだろうね、大臣。この国に生まれた人間はみな日本人なんだろうか？」
「いえ。狂信的教団のように、日本人とは言えないというか、感情的に言いたくない人々もおりますね」
「じゃぁ、かれらはナニジンなんだい？」
「ナニジンというよりも、教団教徒でしょうね。日本国民ではあるけれど、日本人ではなく」
「それでは日本人というのはなんだ」
「日本文化と私たちが呼んでいるもの――言語や食生活、慣習などを修得し、それを、生活規範として採用する人々でしょうか。青い目の侍という表現がありますね。それから外国から日本に嫁いできた人に対して日本の人になったという表

現をすることもありますね。日本人とはそんなものではないでしょうか」
「日本人じゃなくて、日本の人ねぇ、なるほど。紅毛碧眼の日本人がいてもいい、褐色の肌を持つ日本人がいてもいいということか。しかし、外からこの国にやってくる彼らが修得する日本の文化はどうやって守るのだ。それがなくなってはもともこもないだろう」

卍

カウンセラーに連れられて、病院の中をマッチングの場所へ向かう。産婦人科出産外来の前の待合室はおなかのまるまっちぃ女性ばかりだった。もっとも男がいたらキモイわな……などと考えながらさきに進む。マッチング・ルームと書かれた部屋にはいると女性がいた。これも当たり前。
「ども、聖美、長沼聖美です。このたびは、とんだことで」
「はじめまして、誓未来です。よろしくお願いします」
誓は、聖美が思い描いていた女性像とはどこか微妙にちがっていたが、合コン

ではすぐ隣か真向かいに座りたいタイプ、つまり好ましい女性だった。
カウンセラーが二人の顔を見比べて、誓に聞いた。
「誓さんは、この面談の趣旨はご理解されてますか」
「はい」
「それでは、しばらくお二人でお話ください。この部屋からでてもよいですが、病院からは出ないように」
太海は部屋から出ていった。
き、気まずい。なんとかしなくては――聖美はあせった。
「あの、長沼さんは、どのバージョンを選んだんですか」
聖美が話題を探していると誓が突然声をかけてきた。
「え、どのバージョンて？」
「産褥死、育児ノイローゼ、そして身に覚えがない」
「あ、それね。育児ノイローゼがいいかなって。もちろん、もしあなたがよかったらね」

「あーよかった。そのほうが私も気が楽です。それで、どっちにします」
「どっちってなにが？」
「おとぼけですか？　カウンセラーにはきいたんでしょう？　セックスしてもいいのかどうかって」
聖美はたったいまこの部屋を出て自衛隊に入隊しようかと思った。
「あの、誓さんはどちらが？」
「どっちでもおなじです。ちょっと気持ち良くて、ずーっと不快が続いて、すごく痛い思いをする。それからちっとも気持ち良くなくて不快と苦痛があるというだけ」
「そんなものですか」
「はい、そんなもんです。勘違いしないでほしいので言っておきますが、わたし処女じゃありません。これまで子供を五人産んでいます。あなたの子供を産むことになったら、六人目です。それに、あなたと結婚するつもりはありません。覚えておいてくださいね」

「は、はい」
「カウンセラーに好みの女性を聞かれると、男の希望は大体二つしかないそうです。わたしは、そのうちのひとつ。だから、こうして体というか、子宮が空いている限り、借り出されるというわけ。これまでマッチングして断られたことがありません。どうしてだかわかります」
「いえ」
「わたしデザイナー・チャイルドなんです」
「ああ」
「デザイナー・チャイルド自体は珍しくもないけど、私の場合、俗に言う容姿端麗遺伝子ってやつ。母親が男運のないというか、男に縁のない人だったのね。それで子供を作るときに、男好きのするようなデザインをしたというわけ。災難だといわないでね。これで、わたしは幸せに暮らしているし、生活の保証もある。あと二人も子供を産めば、年金が一生もらえる。だからそのことはいいんです。もしあなたがわたしのことを哀れんで、今回のこのマッチングをキャンセルしたと

しても、わたしは、ほかの誰かの子供を産むだけです。わたしの状況は変わらない。でもあなたは、自衛隊に入隊しなくちゃいけないんでしょう？　で、どうします？」

なにがなんだか――。カウンセラーと話していたときの桃色の妄想はこなごなに砕けて、クリーナーに吸い込まれてしまった。彼女はこれが仕事なのだ。だから、彼女の状況は何一つ変わらない。でも聖美は、このマッチングをキャンセルしたら自衛隊にいかなくちゃならない。どっちが――。

「育児ノイローゼでセックスしますっ」

「わかりました」

聖美の返事を聞き終わらないうちに誓は机の上のボタンを押した。ファミレスにおいてあるやつと同じだった。誓はボタンを押しながら吹きだして笑っている。聖美が何をそんなに笑っているのか誓に尋ねようとする間もなく、ノックと同時にカウンセラーの太海が入ってきた。ドアの外で盗み聞きしていたか、他の部屋でモニタしていたに違いない。結果を予測している笑顔で聞いてきた。

「いかがなさることに」
「はい、自然受胎で育児ノイローゼです。だけど、わたしはいま、生理中なので、しばらく待ってください」
「わかりました。それまでは長沼さんにはこちらの病院で待機して、体調を整えていただきましょう」

卍

「文化は守るんじゃなくて伝えるんだよ島田。伝言ゲームだ。途中で変わることもある。でも、それがまた面白い。まさに、社会全体が行うＤＮＡ複製だ。これをミームとか言うやつもいるがな」
遺伝学者の伊藤が執務室のソファーに寝そべって、窓際にたつ島田の背中に言う。しゃべりながら煙草を吸うものだから、伊藤の顔の回りに煙が立ちこめている。
首相の島田は窓から地平線までビルが続く東京の町を見下ろしながらもの思い

にふけっていた。
国民が常に飢えることなく、寒さに震えることなく、戦火におびえることもなくすごせるようにするのが為政者の務めだろう。だが、国家が物理的に拡張できない今、人口を増やしつづけ、生活レベルを上へ上へあげることにいかほどの意味があるのか。国家が豊かになってもそれに比例して人口が増えれば、パイの取り分はいつまでも増えない。下手すれば小さくなることだってある。自由競争時代の現在では勝者が半分以上持っていくのは当然と考えられている。敗者の群れは、残りの半分を分け合うのだから、ますますパイは小さくなる。
「人口を減らすことはできないものかね」
窓の外を眺めていた島田が突然声を上げたので、応接テーブルの上の煙草盆を探検していた伊藤はビクッとして、胸ポケットにしまいかけた煙草を元に戻した。禁煙が常識の現在、ニコチンを薬物として摂取する人間はいても、煙と一緒に吸いこむ人間は少ない。だから当然、煙草は高価である。伊藤も同僚から文字通り煙たがられているが、遺伝子に傷をつける改変実験をやっているんだ、と煙に巻い

ている。
「なんだやぶから棒に」
「日本の人口を減らす。しかし生活レベルは下げられない」
「そんなうまいことができるかね。どうやって人口を減らす。密かに毒でも食わせるか」
「いや、死んでいく人間は放っておく。無駄な治療は行わない。そして、出産は国家が管理する」
「そんなこと成功するものか。だいたい治療に無駄なものはない。そりゃ本人にとっては痛みが長引くだけってこともある。しかし、死んでいく人間でも死ぬ間際まで消費しつづけるのが現代だ。消費しつづける限りその人間の存在が無駄なことはない。延命治療の投薬や手術で人が潤うのだ。まぁ、百歩譲って死んでいく人間を放置するのはいいとしてもだ。出産を管理するなんてできるわけないだろうが。どうやってセックスを管理するんだ。いまだってコンドームなしのセックスでＡＩＤＳを撒き散らす馬鹿なガキがうようよいるんだ」

「セックス、人々の欲望をコントロールしようなんて思わない。出産を管理するというのは、出産できる人を抽選で決めるんだ。そうすれば出産数は完全にコントロールできるだろう。諸費用は全て国家が面倒を見る。養育費も面倒見てもい。そのかわり、国家が認めた出産以外は、なんの保障も受けられない。教育費も自費負担だ」

「金持ちだけは自由に子供を生めるってことか？　まぁ、与太話はそのへんにしておいたほうがいい。放っておけ放って。現時点で与えられている状況を定数として未来を憂いても意味がないぞ。エネルギーも食料もなんとかなる。これまでだってなんとかなってきたじゃないか。人類が滅びるとしてもエネルギーや食料とはまったく別の原因だ、きっと。どのみち戦争や疫病で減るんだ、無理に減らすことはない。そんなことをしてもし減りつづけてしまったらどうする。日本文化が滅びるぞ。さっきもいっただろ、文化は守ったり保存したりできるもんじゃない。人から人へ伝えていくナマモノだ」

「文化が滅ぶと国もなくなるのか？」

「当然だろ。国家のあり方も文化の一つの現れだろうからな。最近のお歳を召した政治家は、それを逆にしようとする人がいるみたいだけどな」
「あぁ、例の愛国教育か？」
与党の長老とその配下の若手を中心に声高に愛国教育を叫んでいるのだ。十数年ごとに流行り病のように繰り返される。
「教育現場が乱れている、若者が凶悪化している、それがどうして、愛国と言うものと結びつくというのだ。自分たちが愛する国を作ってこなかったことなどケロッと忘れていやがる。まったく論理的でない。たんなる郷愁政治だぜ。だいたいあいつらの考えている愛すべき国家ってのはなんだ。伝統なんて5年もあれば作られてしまうもんだ。そんなもんを守れなんてどうかしている。染みだらけの脳みそのなかにある古い価値観で作られた国じゃないか。きっとＤＶＤもパソコンもありはしない。インタビューしてみろ、きっと童謡のふるさとみたいな風景、そうでもなけりゃ桃太郎の風景を描いてくれるにちがいない」
「あんまり言ってくれるな。先輩も多いし、派閥の人間もいるんだから」

「知ったことか。俺には関係ないぞ。教育の荒廃や若者の犯罪凶悪化は、文化の問題だ。愛国精神の欠如とは関係ない。現在の日本文化は、教育現場で先生の話を聞かなくても良いというルールを選択しているんだ。若者が突然路上生活者を襲ってもかまわないというルールをもっているんだ。愛国とは関係ない。国とも関係ない。国を愛したところで、アホはアホだろう。殺人者は殺人者だ。愛国的な独裁者もいる。愛国の文字を背負った暴走族もいる。考えてみろ、人の愛し方にもいろいろな方法や表現がある。国の愛し方だって同じだろう。一つしかないなんて不自然だ。そんな国は滅びる」

卍

育児ノイローゼでセックスって……、アァ恥ずかしい。誓さんが言ったように「自然受胎で育児ノイローゼ」が正しいよな――。

聖美は病室のベッドに寝転んで天井を見ながら考えていた。

タバコを吸いたいと無性におもった。ふだん、禁煙は苦にならないが、きょう

はとにかく吸いたいと思った。染みひとつない天井がそう思わせたのかもしれない。

検査の結果も、身体が若干酸性傾向にあるだけでこれといって悪いところはみつからなかった。あとは遺伝子検査の結果を待って問題がなければ、誓の準備が整ったところで治療になる。

治療って――へへへ。思わずにやけてしまう聖美であった。

ちょっと待てよ。

聖美はベッドの上にガバと起き上がった。

（まさか、治療ってことは、医者や看護婦が付き添うってことはないだろうな）

（ぜったいやだかんな！　こう見えてもぼくはじめてなんだ）

（公衆の面前で童貞散らすなんて真っ平だ）

（やはり自然受胎なんて選ぶんじゃなかった。こんな形で初体験するなんて、やっぱりおかしい）

聖美は激しく後悔していた。

病院のカウンセラーに尋ねると、聖美のような独身者男性の場合はセックスを望む傾向にあり、女性の場合はその逆だという。

「だから、なにも恥ずかしいことじゃないわよ。女性は多くの場合、自分で産むから確認できるのよ、家族を生みだすことをね。ところが男性はちがうのね。唯一の確認というか確証、それとも覚えといったほうがいいかな。とにかく微かな確認がセックスなんだよね」

恥ずかしいとかじゃなくて、無駄なような気がしてきたのだ。セックスして妊娠期間を一緒に暮らすことが、なにか意味があるんだろうか？　子供には何も関係ないじゃないか？　生まれてすぐに母親はいなくなる。それでも家族なんだろうか。妊娠期間中は家族なんだろうか。

聖美は突然子供の名前をどうしようと思いついた。それをきっかけに住まいは？　仕事は？　大きくなったら、学校は？　次から次へと疑問が沸いてきた。

子供がものごころついたころに「お前はおとうさんの兵役の身代わりに生んでもらった」なんて告白してよいものなのか。かといって育児ノイローゼで失踪し

たお母さんとの愛の結晶だなんていうのも白々しいし。普通はなんていうんだ？
お父さんとお母さんが愛し合ってそれでお前が生まれた――か。ま、それよりは生まれてきた目的がはっきりしているからいいか。
聖美は答えが書いていないものかと思って、カウンセラーに渡された『独身「子」帯者のための育児マニュアル』を開き、インデックスを探った。
【結婚はできますか？】【独身「子」帯者用合マッチング・パーティー事業のご案内】【オムツの当て方】【ミルクの作り方】【夜泣きする子供の手当て】
聖美は、育児マニュアルのとりこになっていった。

卍

「デザイナー・チャイルド法を廃止いたします」
島田首相が言葉を止め唇を引き結んだ瞬間にいっせいにカメラがストロボを光らせ、首相の顔を真っ白に変えた。
「残念なことに一部医療機関における遺伝子の使いまわしが発覚いたしました。

また、医師の犯罪行為により、特定の個人の遺伝子が知らぬ間に配合されるという事態も発覚いたしました。政府はこれらの事実を重く受け止め、本日をもってデザイナー・チャイルド法を廃止することに決定いたしました」

質問を受けつけてもいないのに、記者の口から質問が飛ぶ。

「同じ遺伝子持った子供は何人生まれたのでしょうか」

「特定の個人の遺伝子をもった児童が殺傷されたり捨てられている事実をどうお考えですか」

「事態の責任をもってご自身の進退、もしくは、担当閣僚の進退をお考えですか」

島田は質問が落ちつくのを待って口を開いた。

「政府は、今回の被害者に対し、その生涯に渡って万全のサポートを行っていく用意があります。具体的には、同じ遺伝子を持ったもの同士が互いを認識できるようにいたします。また、特定の個人の遺伝子をもたされてしまった子供に対しては、本人および保育者の意向を確認した上で、一人一人に対するカウンセリング体制の整備、さらには施設などへの収容を優先的におこないます」

「責任は？」
「責任とは何の責任でしょうか？」
「今回の事態を引き起こした責任です」
「あなたはだれにあると思いますか？」
記者は黙った。

卍

「へへへ、って何にやけているの」
聖美は看護婦に治療には看護婦も医者も立ち会わないと聞かされて安心していた。
病室の入口に誓が立っていた。
「あ、いやー。日本中の水道管てつながっているんでしょう？　だからさ、水をだす前に相手先のアドレスを入力してから蛇口を開けるとさ、日本のどこからでも水がダウンロードできるなんて仕組みができたら面白いだろうなァって。名水

だろうが温泉だろうが思いいのまま、ね、いいとおもわないこのアイデア」
「変なこと考えるのね」
聖美は適当に思いついたことをベラベラと口にしながら、体じゅうの血液が耳たぶに集中するのを感じていた。
「もうちょっとまってくださいね。もうすぐ終わりそうだから」
もうすぐ終わるってなにが？　あ、生理か――。耳たぶの血が今度は一気に身体を下がって行く。
「なんか変だよね、こういう会話って。抽選で当たった夫婦でもそうなのかな？」
「そうじゃないの、しらないけど。抽選に当たったんだから、子供作らないと損なわけじゃない。だから一所懸命よね。愛の結晶なんてどこ吹く風ってかんじじゃないのかな」
「そっか、有効期限は当選後一年間だものね。僕の場合もそうなの」
聖美は自分に都合の良いことを想像して、マニュアルに手を伸ばしかけた。
「いえ、自由受胎の場合は一回やってだめだったら、体外受精にバージョン変更

です」
　あーそうなんだ。一回やって――か。こうなったら、なんとしてでも一回で決めてやる。聖美は掛け布団の下で握りこぶしを作って誓った。
「ところで長沼さんの遺伝子検査の結果は出たの」
「まだだよ。なんで？　ぼく変な病気なんてもってないと思うよ」
「そんなことはあなたの風貌を見ればわかるわよ」
「そうなんだー。誓さんて人相占いもするの」
「あなたもデザイナー・チャイルドでしょ」
「え？」
「ちがうの？　ちがっていたらごめんなさい」
「ぼくね、小さい頃に捨てられたんだ。だから、自分の出生の秘密ってのを知らないんだよ。だけど誓さんはどうしてそんなことがわかるの？」
「あなたの顔よ。髪を長くして顔を隠しているけど、あなたっていわゆる美少年だもの。それも、いろんなパーツの寄せ集めなの。ふくよかな丸みをもって生え

際のきれいな額、太くて濃い眉、奥二重で黒目がちの眼、高い鼻だけど嫌味なほどにはとんがっていない」
そう言いながら誓は聖美の顔にかかる髪を掻きあげ、頬を両手で包んだ。
「完璧よね。鏡を見て自分でもそう思わない？」
「バランスが取れすぎていて好きじゃないんだ。人にはあんまり嫌われないけどね」
「わたしはね、女性には嫌われるわ。一緒に並んでいると、男性の目が私にだけ集まるのよ。私がそうしているんじゃないの。遺伝子のせい」
聖美は自分も一目で誓さんに好感もっただけに、他の男たちと同じレベルに扱われているようで、気分を害してうつむいた。
「だからじゃないんだけど、こうして、色んな人、できるだけ自分とはかけ離れた人の子供を産むのは、わたしの遺伝子に対する復讐なの。薄めてやるの」
「でもそれじゃなんで僕とのマッチングを承諾したのさ。デザイナー・チャイルド同士じゃあまり遺伝子が変わらないんじゃないのかな。僕がデザイナー・チャ

イルドかもしれないってことは初対面の時にもうわかっていたんでしょう？」
「正直、はじめてなんだな、嫌だと思わなかったの。一回ぐらい遺伝子の言うことを聞いてあげないといけないかなって思ったのかな」
「へへ、ありがとう。それもぼくがもしかしたらデザイナー・チャイルドのおかげかな」
「遺伝子検査の結果がでればすぐにわかるわ。デザインの刻印は必ず残されている。どこのクリニックで行われたかもわかるのよ。ちょっと聞いてみましょ」
誓さんはベッドサイドのインタフォンを押した。
「五七二号室の長沼ですけど、遺伝子検査の結果を知り……」
長沼ですけどだって――。呼び捨てに、しかも、名前じゃなくて、名字を呼ぶなんてなんだか家族みたい。いつのまにか血が再び下半身に大集合をはじめていた。

卍

「デザイナー・チャイルド事件は、見過ごす事のできない、その原因の特定と関係者の処罰を行わなくてはならないものです。しかし一方で少子化はわが国にとってまだまだ深刻な事態であります。これを放置することは政府としてできることではありません。そこで、われわれは、デザイナー・チャイルド法にかわる新しい措置を講じたいと思います」

島田首相はそういうと脇に控えていた厚生労働大臣に演壇を譲った。

「デザイナー・チャイルド法廃止の代替措置として、今般、バースコントロール法を上程することになりました」

バースコントロールという古めかしい言葉に失笑し、穴のあいたコンドームでも配るのかなどと不謹慎なことをささやく記者もいた。

「政府が出産を管理し、出産育児を希望する国民は、居住する地域の行政に対し申し込み、抽選を経て当選したもののみが権利を得ます。権利の売買はもちろんできません。申し込み者は次の項目に該当する場合を除き自由です。

〈子供が成人するまでに保育者のどちらかが自分が生まれた年の平均余命を上回る場合〉
〈一七歳未満の者〉
〈禁治産者〉
〈自己破産精算中の者〉
〈精神疾患で治療中の者〉
〈自身が被告人として裁判審議中のものおよび収監中の者〉
です」
「大臣、単身者でも子供を持てるのですか」
「先の項目に該当しなければ大丈夫です」
「高齢の方でも子供を持ちたいという人の権利を侵害しませんか」
「子どを持つ権利を侵害するつもりは毛頭ありません。政府のコントロール下での出産に合意した方は、出産に関する全ての費用、そして、出産後の費用もすべて政府が援助いたします。税制上も優遇措置を取ります。具体的には、消費税を

免除いたします」
「でー」という、おどろきとも呆れるとも言えない声が上がった。
「ただし、政府のコントロール外での出産に関してはそのような援助は一切ありません」
「金持ちは大丈夫だということですね」
「そう考えていただいても結構ですが、価値観は一様ではないですから、富裕層が必ずしもコントロール外の出産を選択するとは考えていません。さらに、政府のコントロール下では、今般禁止した、デザイナー・チャイルドを部分的に認め、デザイナー・チャイルドを選ぶ権利を抽選で与えます。使う使わないは自由。また、今般の事態を踏まえ、使い回しなどは行われないような態勢を整えます。フルオーダーの遺伝子です」
国民的な議論が沸き起こるかと思われたが、セックスという欲望をコントロールするものではなく、あくまでも政府管理下での出産の奨励だっただけに、さしたる反対の声はなかった。一歩間違えれば愚策ともなる「奇策」ともいえるもの

だっただけに世間の驚きも大きく、デザイナー・チャイルド事件の責任論などどこかに飛んでしまった。

政府は次々と周辺の法整備も進めた。無自覚なセックスによる堕胎の増加を禁止するため、優生保護法を改正し、堕胎の要件から経済的自由を削除した。さらにすでに治療が可能になった病気を除いて、出生前遺伝子診断の結果を受けての堕胎を禁じた。

「たとえ障害を持って生まれてこようと政府がしっかりとサポートするという強い表示です。現代の医学では、遺伝子由来の疾患をもった子供が生まれる可能性の予測や排除は充分に可能です。しかし、わたしたちはあえてそれを選びません。遺伝子は可能性の宝庫です。老化のメカニズムを解明するのに、早老症の人々への治療・研究が役だったのと同様、遺伝子の多様なありかたこそ人類の進化に寄与するからであります。現代人類がネオ人類に進化するなどとは誰も考えていないと思います。進化系統樹を見てもわかることです。進化と呼ばれる動きはすべて幹の太い部分で起こっているのです。人間は枝の先、つまりは進化のドン詰ま

り、袋小路にいます。多くの絶滅動物と同じポジションに人間はいるのです。人類に進化の可能性をわずかでも残しておくために、遺伝子の多様性を残しておく必要があります。遺伝子使いまわしで多様性が失われたからこそ、インフルエンザで多数の子供の命が奪われたのです」

島田は一気に論じた。

「ですから、後天的に治癒できる方法が見つかるまでは、遺伝疾患の多くは保存します。それが人間の生命の安全保障の観点からきわめて重要な事柄だと考えるからであります。障害を持って生まれてこられた生命は、まさに人類にとって貴重な存在、貴種であります。わたしたちは、その生命の存続と、ＱＯＬを保障するべく最善の努力を惜しみません」

貴種を授かった家庭は税金も免除され、養育費が国から支給され、医療費も無料だ。育て上げれば、夫は貴種を育てる父として、会社での地位を約束され、社会的名誉も、栄誉も手にすることができる。母もまた働いていれば地位を約束され、働いていなくても、地域社会での栄誉と権力を与えられる。しかも、貴種の

親は優先的に次の出産権利を与えられることになった。逆差別だという声もあったが、差別を制度上なくすには、これぐらいの極端さがあってちょうど良いのだと、島田首相は訴えた。

結局、誰かが極端に不幸せになるという法案ではなかっただけに、すんなりと審議はすすみ可決された。

メディアはさっそく、抽選に選ばれやすい風水などという記事をぶちあげた。「おれたちの飯のためも残されったってわけだ」とうそぶいたのは難病に立ち向かう家族などという番組を制作するテレビディレクターで、新しい企画を考えなくてはと嘆いたのは、大家族をネタに番組を作っていたディレクターぐらいだ。

卍

「えーと長沼さんの遺伝子検査の結果なんですが、ちょっと困ったことがあってですね」

誓に病室に呼び出されたカウンセラーの太海が端末からデータを呼びだす。

「これです」
聖美は太海が差しだした端末画面の文字を追った。
クリニックナンバー:85236
DNAデザイナー登録ID:y467e1
処置日:2005.11.26
デザインパターン:VMV3IH9K1VLWN06
特長:容姿(a+++)性格(a++)知能(a)
「これが?」
「長沼さんはデザイナー・チャイルドなんですね。あれ、ご存じなかったんですか? デザインパターンの頭文字のVMVというのがデザイナー・チャイルドの記号です」
「おれ捨て子だから。それよりか困ったことってなに?」
「えーとですね。デザインパターンの詳細をデータベースにアクセスして調べたいんですが、セキュリティがかかっているんです。長沼さんはパスワードご存知

ですか？」
「自分がデザイナー・チルドレンだってことだって今知ったんだよ。知るわけないっしょ」
「困ったなぁ」
「ぼくの遺伝子パターンは検査すればわかることでしょ」
「もちろんです」
「それで異常がなければいいんじゃないの」
「普通の人だとそれで良いんですが、デザイナー・チャイルドの場合、遺伝子のどこを改変したか明細をつけることを義務づけられているんです。とくに、誕生後の生活環境によっては遺伝子パターンが改変している場合があります。デザイナー・チャイルドの場合、元のパターンがわかっていますので、環境と遺伝子の変化の関係を考察するために重要な指標となるんです」
「どうしてぼくの場合、パスワードセキュリティがかかっているんだろう」
「セキュリティがかかっている場合で、現在知られているのは三パターンありま

す。ひとつは両親がその事実を子供に知られたくない場合。ふたつは遺伝子に欠陥があり、他者にそれを知られると本人に不利になるため。最後は、デザイナー・チャイルド事件関係者だということです」

「ぼくはどれなんだろう？　おれは捨て子だから一番目が順当なんだけどさ。二番目はどうなの？　検査の結果でなにか異常があったのかな？」

「とくにないです」

「じゃぁ、一番目か最後ってことか？　デザイナー・チャイルド事件てなに？事件というくらいだから、良いことじゃないんだろうけど」

太海が説明し始めた。

「二つの局面がありました。一つは同一の遺伝子が使いまわされたもの。もうひとつは、特定の個人の遺伝子が政治的宗教的な意図を持って使われたということです」

「結局同じことじゃないの？」

「見かけはね。でも、前者は、頭脳明晰容姿端麗の遺伝子をばら撒いたというも

ので、元の遺伝子が誰のものかは特定されていません。おそらくは、一流半か二流のスポーツ選手や芸能人のそれを買うか盗むかして、遺伝子をスクリーニングして、疾病遺伝子を排除したものを使ったんでしょうね。おまけに、医者が面倒くさがって頭脳明晰容姿端麗型の注文に、細胞分裂の途中で分割を繰り返した同じ受精卵を使ったものだからことは大きくなったんです。同じ遺伝子をもった子供が生まれてしまった。母親も父親も、誕生日も違う双子、三つ子――実際は一九八子だったんだけど、が生まれた」

太海は自分の説明が聖美に動揺を与えていないか確認するように目を上げた。聖美はそれで？　というよう眼をわずかに見開き小首を傾げ、太海に話の続きを促した。

「もうひとつは、日本と敵対する独裁国家の指導者の精子やカルト教団教祖の精子が用いられたということ。悪魔的犯罪行為ですね。独裁者の精子は彼がファンだという映画女優の卵子と受精させるために日本に持ち込まれたのと噂されたわ。あまったから信奉者の医者がばら撒いたらしいの。はた迷惑よね」

「おれはそのふたつのどちらかというわけか。どっちにしても両親がぼくを捨てたわけがわかったよ」
「でもいまどき珍しいですね。捨てた親が誰かなんて、調べればすぐわかることなのに。調べてみますか」
「あ、いや。調べればすぐわかるってどういうことですか？」
「だって、クリニックも何もかもわかっているんです。記録は残っているはずです」
「ぼくが捨てられた段階で調べればわかったってことだよね」
「警察は当然そうしたはずです」
「なのにぼくは施設で育てられた。つまり、親はどうあってもぼくを捨てたかったということじゃない？」
「そうなのかも、そうでないのかもわかりません。どうします？」
「ちょっと考えさせて」
聖美は頭が混乱していた。

（両親は捨てたことがわかるのにぼくを捨てた。なぜだ？）
（捨てたあとにきっと見つけ出されたはずだ。なのになぜだ？）
（見つからないという自信があったのか？　両親がバラバラになって逃げたのか。おれが生まれたこと原因で離婚したのか？）
（それにしても両親のどちらかは見つかったはずだ。なのにぼくは引きとられなかった。なぜだ？）
（引き取れない事情があったのか。それは何だ？）
（それとも――両親が僕を引き取りたくない理由はぼく自身にあったのか？）
「あのー、太海さん。デザインされているって、どんなふうにされているのかわかりますか？」
「ええ、もちろんです。このデザインパターンという記号をデータベースにアクセスして調べれば――」
「あ、そうか。パスワードがないとだめなんだ。どうすれば手に入る？　結局それを手に入れなくちゃいけないんでしょう」

「市役所のサイトにアクセスして手続きをするのが早いと思います。遺伝子パターンが出ていますので、それを提出して照合すれば本人確認してくれます」
「端末を貸してくれる」
誓は長沼の病室をそっと抜けだし、病院の外に出た。バッグから煙草を取りだし火をつけ、深々と煙を吸いこむ。肺の隅々まで煙を押しこむように吸いこんだ。これから妊娠しようとする人間が煙草などもってのほかだとはわかっている。誓も妊娠期間中はぜったいに煙草は吸わない。しかし、それ以外の時間はヘビースモーカだった。ここ六年ぐらいは毎年のように妊娠出産を繰り返してきた。医者には少し休んだほうが良いと言われているが、休むとせっかく傷めつけてきた自分の体が元に戻ってしまうようで嫌だった。遺伝子の言うなりになってたまるかと思いつづけてきた。
でも今回で止めようか、長沼に結婚はしないと言ったけれど――。
煙草をつま先で踏み消し、吸い殻をジーンズのポケットに押し込むと、長沼の病室にもどった。

卍

島田は執務室でテレビを見ていた。友人の遺伝学者の伊藤が出演するから「見ろ」と電話してきたからだ。

「遺伝子がみな同じなったら、遺伝子プールの多様性が枯渇して、一種の近親相姦状態となって人類が破滅します。もし事件が発覚しなかったらと考えるとこわいですね、伊藤先生」

不勉強で有名なアナウンサー上がりのニュースキャスターがお粗末な終末予言を披露している。伊藤は「罠にかかったな」という微笑みを浮かべて口を開いた。

「いや、そうなると遺伝子は自分の生存が脅かされて困るわけです。だからかならず眠っている可能性を呼び起こし、変異をするはずです」

「変異が起こるというのは確実ですか」

「わたしはあなたのような予言はできません。しかし、ダーウィンが進化論のヒントを得たことで有名なガラパゴス、そして、いまなお、小進化が起こっている

といわれるアフリカのヴィクトリア湖、このどちらも孤立した生態系を持っています。そこに棲む生き物は自然と血が濃くなる。血が濃くなりすぎたことに危機を覚えた遺伝子が変異を起こし、生態とくに食生活を変えたと考えられます。その結果が現在みられる環境に適応した棲みわけではないかと思います。人類で同じことが起こらないとは限りません」

「どんな人間が生まれるんでしょうか」

「わかりません。ただ、僕自身はその変異がわたしたちの受け入れられるものであることを望みますが」

「私たちが受け入れられない変異とはどんなものですか？」

「私たち現世人類を捕食するネオ人類の誕生とかです」

「そんなことが起こるんですか」

「起こります。歴史がそれを裏付けています。ある種の人類の祖先は、その後に生まれた別の祖先に捕食された可能性が指摘されています。なんといっても現在この地球上には大型の蛋白供給源が七〇億もいるんですよ、魅力的でしょう」

「信じられません」
「あなたが信じなくてもかまいません」
キャスターは説明してくれるものと思ったらしいが、いじわるな伊藤はそれ以上説明しない。しかたなくキャスターは「政府による徹底した遺伝子管理を求めます」と陳腐なコメントを残してコマーシャルに変わった。
伊藤のやつ騒ぎを大きくして楽しんでやがる。島田はテレビのスイッチを切った。

卍

再発行された聖美のパスワードを使って太海がデータベースにアクセスした。
「長沼さん、結果が出ました。良かったですね。あなたは独裁者とも狂信者の遺伝子とも関係ないです。それにデザイナー・チャイルド事件には関係していません。どうやらご両親が独裁者の遺伝子不正使用事件に関連しているのではないかと疑われて、あなたを虐待したために、保護プログラムが適用されていたようで

す。ようするに両親があなたから逃げたのではなくて、あなたを両親から守るため、両親があなたを追いかけてこないようにするために、パスワードが設定されたと考えて良いようです」
「それって喜ぶべきこと？」
「じゃないですか、いちおう」
太海は端末の画面を長沼に向けて見せた。
「どうだったの、長沼さん」
煙草の臭いがした。振り向くと誓が部屋にはいってきて画面を覗き込む。
「よかった。はじめて完全無欠の遺伝子と交配できるのね」
「まともかどうかわかったもんじゃない」
「でも、長沼さんの前の人なんかひどかったんだから。悪い遺伝子の国際見本市見たいな人でさ、本人には悪気はないんだけど、可愛そうよね。糖尿病因子、肥満因子、肝硬変因子ぞろぞろでてきたわ。そうそうアルツハイマーと心臓病因子もあった。親を疑ったわよ。それだけの因子があれば普通、スクリーニングする

はずなんだもの。そのために結婚できないのよね。でも、どうしても子供が欲しいって、抽選会に参加したんだって」

聖美は誓さんにそいつとセックスしたのかどうか聞きたかったが、聞けなかった。

「太海さん、それじゃ、おれは検査をパスしたわけかな？　てことは、治療はいつになるのかな？」

聖美は誓さんに聞いた。

「そうね、十日後かな」

「太海さん、治療はどこでやるんですか？　ここ？」

「長沼さんはここでいいわけ？」

誓が聞いてきた。

「いやどこでもいいんだけど。他に知らないし。ことがことだけに病院のベッドっていうのもどうかナ、なんて考えたりして。へへ」

「ここにしよっ、長沼さん」

誓にそういわれると聖美は逆らうことなどできなかった。
「そうですね。治療ですもんね」
「まぁ、そう治療治療言わないの。痛い注射打つわけじゃないんだからさ。もっと気を楽にして、ね。焦るのがいちばんよくないんだから」
誓はそういって聖美の耳元に何事かささやくと「じゃ、十日後にね」といって病室を出ていった。
太海が長沼を見ると真っ赤な顔をして口をパクパクさせている。
「長沼さん？　大丈夫ですか」

卍

「どうして国民の不安を駆りたてるようなことをいうんだ」
島田は首相公邸に遊びにきた伊藤にテレビ出演の感想を聞かれて答えた。
「しょうがないだろう、テレビ局の人間が言えというんだから。それに、おれは嘘をついたわけではない。科学の真理をいったまでだ」

「それにしても、ネオ人類が現世人類を捕食するなんてたちの悪い冗談だ」
「なにをおセンチなことをいっているんだ。チンパンジーから生まれたネオ人類に食われるよりマシだろうが。人類が滅びても遺伝子はネオ人類に引き継がれるんだぞ。それともなにか、おまえは人類がネオ・チンパンジーに食われて滅亡してもいいというのか」
「そんなことを言っているのではない。政府が遺伝子のバラエティを確保しようと躍起になっている時期に、遺伝子の均一化がネオ人類を生みだすなんて、どうかしているんじゃないか」
「遺伝子のエバラヤキニクのタレなんてこと――この部屋寒くないか？　おまえが俺に相談もなく決めたことだろう。事前に相談してくれたら止めたさ。バラエティが進化を生むなんて間違っている。人間のゲノムのバラエティが人間と最後に袂を分かった仲間のチンパンジーより少ないというのは事実だぞ。個体数で圧倒的な差があるにもかかわらず、ゲノムの変異は少ないんだ。どういうことかわかるか。わからないだろうから説明してやるが、人間が森を出て草原に進出して

から、生存の危機に見舞われたからだ。個体数が激減して、結果として、近親交配になったんだろうな。数世代にわたりそういう状況が続いたためにゲノムのバラエティが少なくなった」

「人類はチンパンジーより見た目も性格も多様じゃないか」

「そりゃ偏見だよ島田。お前の言っているのは、欧米人からみたら、日中韓人の見分けがつかないというのと同じだ。同じに見えるのは、自分が識別しようという意思を持たないからだ。おまえだって、ただの有権者とたんまりと献金してくれる有権者は区別するだろう。人間がアリの列をみても一匹一匹の区別がつかないが、アリは仲間同士できっと個体識別している。ありよさん、ありきちさんなんて呼び交わしているかもしれんぞ」

「ばかばかしい」

「なにがばかばかしいものか。宇宙からみれば、人間だってアリと同じに見えるはずだ。種として現存する生き物のなかで仲間内の遺伝子の差なんてそんなものさ。だいたい他人の空似ってのもゲノムのバラエティがないから起こることだ」

「ヒトゲノムのバラエティを保持する政策は間違っているのか」
「いや、間違ってはないないさ。お前は、人類の進化を押しとどめた人間として後世に記録されるだけだ

卍

治療の日。
昼間なんだ――聖美は病室の窓に広がる青空につぶやいた。
「こんにちは」
誓がはいってきた。つづいてカウンセラーの太海がするりと入ってきた。
「おじゃまでしょうけど。治療の実施に当たってサインをいただく規則なもので」
聖美がサインしている間、誓が窓のカーテンをジャッと音をたてて引いた。
「それでは」
太海は後ろも振り向かずにでていった。
「長沼さん、鍵を締めてください」

「あ、はい」
聖美が鍵を占め部屋を振りかえった。先ほどまでとは違った空間がそこにはあった。ああ、この部屋の雰囲気どこかで見た記憶があるなぁ。そうだ――、学校だ。体育の時間に教室で着替える時に、カーテンを引いたときみたいだ。だぁれもいなくて、カーテンから漏れる陽射しの帯に埃が踊っていて、それでいて人の気配だけは濃厚な教室――。
「長沼さん？」
「あ、はい」
誓がベッドに腰掛けて、隣の場所をトンと叩いた。聖美はヒョイと頭を下げて座った。
「それじゃはじめましょうか？」
「あ、はい」
自分でもこっけいだと思ってはいたが、それしか言葉が出てこなかった。治療の前にいろいろと本を読んだけど病院でのデートの方法も、病院デートのムード

づくりの方法も、治療でおこなうセックスの方法なんてどこにも書いてなかった。
「まかせてね。偉そうにするわけじゃないけど、それが一番だと思うの」
十日前にも同じことを言われた。
「あ、はい」
「素直でよろしい」
聖美は誓の手でベッドに倒された。これじゃ逆だ――聖美は思った。
聖美は誓の指示のままに全身を駆使した。怖くて眼を開けられなかった。
「上になって、ここに手をついて、膝はここ。目を開けないとわからないでしょ、長沼さん」
「あ、はい」
目を開けるとすぐ増したにまじめな顔の誓がいる。あわてて目を閉じた。
誓の手が聖美を包み導いた。
ムルと二人は一緒になった。
誓が「むうん」と息を吐いた。

聖美がフックリとした壁に当たった。
「そこが子宮」
……。
ベッドがぎしぎしと音を立てた。
……。
ドアの外をストレッチャーが走りぬける音がした。
……。
窓の外で徐々に近づいてきた救急車が「ピ」とサイレンを鳴らして止った。
……。
「もう大丈夫」
「あ、はい」

卍

「出生率はさがらないね」

島田は厚生労働大臣の報告を受けて苦笑いした。政府のコントロール下での出産の権利を獲得するための抽選会は大人気だった。抽選会で幸運をいとめるためのおまじないやグッズも人気を集めた。子供を産めば確実に生活は楽になる――そういう希望が人々を熱狂させた。

「はい。子供を作ってはいけないと禁止するわけではないのですが、だめといわれると逆に燃え上がるのが……」

「下品だぞ、大臣」

「失礼しました。やはり子供の育成にかかる諸費用が無料というのが一番の理由のようです。生涯で数千万円が浮く計算ですから。家一軒が購入できる金額の可処分所得が増えて、経済状況も良くなると思います」

「これまではいつでも好きなときに子供なんて作れると高を括っていた人々も慌てているようだな」

「はいー。子供を持つとお得なことが一杯ですから。これまでブランド品を買うために子供なんて作らないといっていた人たちが、ブランド品を買うために子供

を作ることもできるわけです。しかもでデザイナー・チャイルドの権利も場合によっては得られるわけで。今回は、まさに価値のあるデザイナー・チャイルドです。二〇年前の遺伝子バブルの時とは違います。完全オーダーですからね。子供がブランド化します。飛びつかない手はないです」

「そうなるといいがな。何か問題はないか？　遺伝子使いまわしのような落とし穴はないか？」

「今回は、そういう処理は一切行わない施策ですから問題はないと思いますが。あー問題といえるかどうか。単身者の応募が思いのほか多いです」

「兵役逃れか？」

「いえ、将来結婚に有利だからだそうです」

「子供などいたら結婚には不利ではないのか？」

「しかし、子供がいると結果として所得が増えるし、乳飲み子を抱えている人間と付き合えば、その間は同伴者も消費税抜きで買い物ができるんですよ。ナンパの口実にはなるでしょう」

「なるのかね？」
島田は茶を運んできた女性秘書に尋ねた。秘書は声を出さずにうなずいて部屋を出た。
「ほんとかねぇー」
「男も女も子供を育てていれば社会的な地位が約束されるし、おまけに子供がデザイナー・チャイルドであれば、いけいけどんどんどんみたいですよ」
「なにがいけいけどんどんなんだ？」
「いや、俗に言う入れ食いって奴ですね」
「どうやら、この政策は失敗だったようだな」
島田は苦笑するしかなかった。

卍

聖美と誓は治療の後、病院の特別室で暮らしている。二人だけの暮らし。これが家族というものなのか？　聖美にとって父親は施設の寮父であり、母は寮母だっ

た。彼らも途中で三回交替した。兄弟姉妹は施設の仲間だった。これもまた増えたり減ったりした。それが当たり前の家族だった。何か目的があって集まったわけではなかった。いま、聖美は誓が生むかもしれない子供を育てるために存在になりつつあった。

誓に無事に受胎したと告げられたのは、治療の七週間後だった。

「ほら、みて。これが赤ちゃん」

超音波画像を誓さんが見せてくれた。

ぼくのはじめての家族だ――と思い込もうとおもったが無理だった。とても人間とは思えない。ゴミ箱のそこにへばりついたティッシュのようにしか見えなかった。

「女の子だって」

治療一一週目。誓はここ数日、つわりがひどかった。

超音波画像のなかの子供にオチンチンがあるというのだが、聖美にはわからなかった。
「小さいんだね」
「あたりまえじゃない、体重がまだ二〇グラムなのよ。それなのにオチンチンが一センチもあったらどうするの」
昔の人は、精子の中に小さな人間の雛型ホムンクルスが入っていると考えたらしいが、どうみてもハムスター、いや尻尾があるからハツカネズミか。
カウンセラーの太海が「これ病院からのサービス」といって、僕の顔の横に胎児の超音波画像の組みこまれたプリクラを持ってきてくれた。趣味ワルー。
「もう動くのよ」
治療一九週目。超音波画像のなかの子供の頭に毛が生えてきた。体内では不要だろうし、生まれてくる時に邪魔になるんじゃないかと聖美は思った。

「体重一五五〇グラムで順調だって」
治療三一週目。誓のおなかのふくらみも目立つようになってきた。からだが厚みを増し、全体に丸くなってきた。
時々お腹を触らせてくれる。グーッと聖美の手を押し返すこともある。二人で見詰め笑う。

「もうそろそろ生まれるかも」
治療三五週目。生まれたらほどなく誓との別れが来る。
超音波画像の子供はすでに人間の格好だ。足を腕で抱えるように身体を丸める超音波画像のなかの子供は頭が異様に大きく、まるでインカの石像だなと聖美は思った。

「これが胎盤です」
子供は無事に生まれた。母体も大丈夫だそうだ。聖美は赤ん坊に会う前に、出

産後の分娩室にいれられ、胎盤を見せられた。
「胎盤は父親の遺伝子由来の組織だといわれています。一種の寄生体です」
聖美は寄生体といわれて、目の前のステンレスパッドの中の血まみれの塊――失敗したほっとケーキみたいなもの――がようやく現実味を帯びたものとして感じられた。
「胎児は母体にとっては異物なんですね。だから排除しようとするんです。意外でしょう？　母というとすべてを許し、包みこむイメージがありますが、実は嘘なんです。母体のいじめから子供を守っているのがこの胎盤なんです。オスは自分の子孫を残すために必死なんですよ。十ヶ月の間、母親だけが子供を育てていたわけじゃないんです」
この医者、母親に虐待されて育ったんじゃないのかと聖美は思った。
「この傷はなんでしょうか？」
胎盤に噛み跡のような傷がある。聖美は医師に尋ねた。
「あぁ、それね。珍しい事なんですが、お子さんが口にくわえて生まれてきたも

のですから」
「自分でですか」
「意思を持ってそうしたとは思えませんが。偶然でしょう。一部が消化管に入りこんでいたので、取り出しておきました」

卍

「ほらみてごらん。ぼくたちの赤ちゃんだよ、かわいいねぇ」
聖美はベッド脇のベビーカーゴを覗きこみ、寝ている誓に声をかけた。誓は毛布を引きあげ顔を隠した。
赤ん坊を取り上げた医者は、「形態が若干、通常と異なっていますが命に別状はありません。ご両親お二人ともデザイナー・チャイルドということで、遺伝子パターンが思いのほか似ていたのかもしれません。誤解を恐れずにもうしあげれば、赤の他人の双子のようにです。貴重な存在ですから大切に育ててください」といった。

聖美の赤ん坊には尻尾が生えていた。オチンチンと見えたのは、腹に抱えていた尻尾だったのだ。歯もすでにはえていた。いまも、聖美の指をコリコリと噛んでいる。

「ソレはなに！　いったいなんなの！　わたしは人間の赤ちゃんを産んだんじゃないの？」

「人間――僕たちの赤ちゃんさ。でも、みためがこれまでの人間とちょっとちがうだけじゃない」

「なんでそんなに冷静でいられるの？　わたしがソレの母親だというの!!　生まれる時にわたしに噛みついたのよ」

「いや、僕も母親さ。きみの体の中で、ずっと赤ちゃんと一緒だった。君からこの子を守っていたんだよ」

「なにいっているの？」

「ほら笑っているよ」

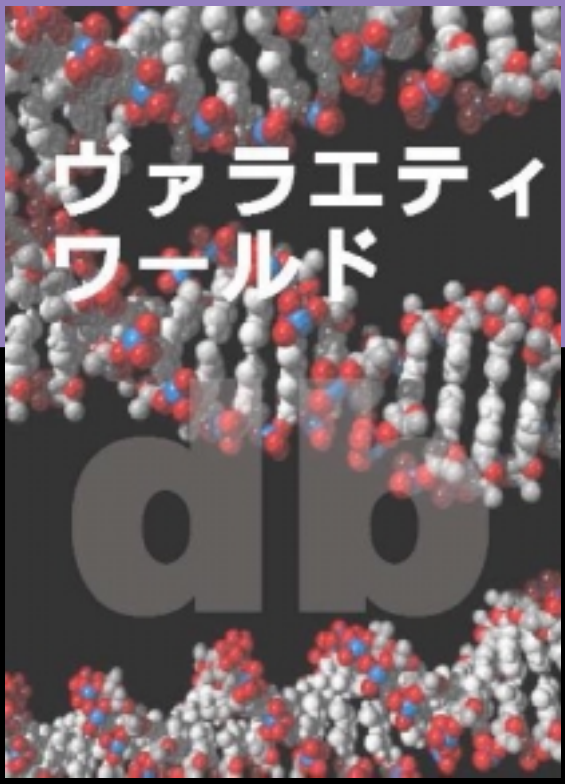
「いやぁー。あっちにやって」

「だめだよ。契約完了までまだ時間がある。君は育児ノイローゼになるんだから」

（完）

ヴァラエティ・ワールド
**2002年12月25日　初版発行**

**著者**　ぶんろく
**発行**　Bunroku's Factory
© *Bunroku 2001*




ぶんろく